

## 電車

福本紘久

万次郎が少女に出会ったのは全くの偶然のものだった。彼はそれまで偶然を信じたとしても、それは神の所業によるものだとは思わず、人間の偉業によるものだと考えていた。しかし、今回ばかりは彼は神を信じ、感謝した。それほど少女は万次郎を惹きこんだのだ。

少女は向かい側のホームに立っていた。その様子はどこか違う世界を見ているようで、万次郎の方には全く気付いていなかった。万次郎と距離はおよそ20メートルで、弱視の万次郎には遠い距離であった。しかし少女は万次郎の心に強く映った。彼女は季節外れの光り輝くワンピースを身にまとい、その肌はピアニストのようにきめが細かく、白鍵のように美しかった。彼女にはどこか芸術品を逸脱した神々しさがあつた。彼女の吸い込むような黒髪がそれを強めているのは間違いがなかった。万次郎はその美しさを、精神的なものだけでなく、物理的に捉えようと試みた。

こちら側のホームに電車がやってくる。一步一步と少女に向かって万次郎は足をすずめた。もう一步というところで万次郎は彼女に届きそうになる。しかしそれは実像ではない、虚像なのだ、すなわち死である。万次郎はこの時ほど死を自覚し、楽に感じた瞬間はなかった。しかしその直後に妻のシャルロツテが臉の下に浮かぶのだ、万次郎は足を止めた。すると電車が「くそう、のがした。」という風に目の前をすばんとすぎた。

万次郎はこの神の偉業による偶然を心に留めることにし、一生の精神の宝にしようとして、電車に乗った。

万次郎が人生の宝を鑑賞して以来、芸術の才があると信じている彼は一か月がたつても、彼女のことを強く覚えており、そのことを一種の誇りとしていた。事実彼女との遭遇は神秘的な出来事だったが、彼はそれを自分なりに修飾し、美化することで少女を自分のものにしようと試みたのだ。少女は万次郎にとって彼独自の芸術品となっていた。しかし他人から見れば、彼はロングキャリアのただの銀行員なのだ。

彼は今の本職をただの生活のための手段としてしか考えていなかった。結婚もそれに近いものがあつた。芸術家としての精神活動を行うには家事をしてくれる女性が自分には必要だと彼は考えたのだ。万次郎に愛情を注ぐシャルロッテのように彼の周囲は彼に必要な様々なものを与えた。しかし万次郎にとって彼の周りのあらゆるものは手段でしかなく、彼が真にほしいものは精神の中にあつたのだ。そのため彼には常にどこか虚無感や鬱憤があり、彼はそれを振り払おうとするかのようにいつも髪をかき回したり、犬のように身震いするような癖があつた。

しかし、そんな彼が手段にできないものが一つあつた。それは彼にとって忌々しき一時間以上に及ぶ通勤時間であつた。

この通勤時間は彼にとって人生で最高に無駄な時間だと考えられていた。彼はその時間の多くを音楽や読書に費やしていた。万次郎のお気に入りにはタツソオであつた。彼はタツソオこそが最大の芸術家にして芸術そのものであると考えていた。タツソオを読みながらアイポッドで音楽を聴き、そしてタツソオはどんな音楽をも拒絶する。これが彼の以前の楽しみだったのだ。シヨパンも、バッハもドビュッシーも、名だたる音楽家たちをタツソオはすべて拒み、蹴散らすのだ。それほど彼にとってタツソオは何か魔力を享有していた。

少女に会うまで、万次郎は地下鉄の地下を異様に恐れていた。陽が当たっている間は確かに通勤は彼の手段だったのだ。しかし、いざ電車が地下へもぐり現代人の作り上げた世界へ入り込むと、彼はタツソオを手につただけになり、大人しく音楽家たちに従つた。

こうなつてしまったのも、彼が以前こんな経験をしたことがあるせいである。

それは仕事の帰りの電車だった。仕事の要領が悪い彼はその日も簡単な仕事を半日かけて完了したせいでくたくたに疲れていた。電車の最後部車両に彼は乗り込み、車掌と壁一枚隔てて背中合わせになつた。車内はいつも通り黄味がかつた明るさで、いかにも三流芸術家が色を塗った感じだな、と彼は思った。ちょうど車内に西日が差し込み、蛍

光灯と三流空間とが器用に対比されたので、彼はふん、と笑った。

ふと後ろを見ると車掌の手元にある計器の奥に外界が見えた。外界はいつものように安定して美しい。彼がうっとりしていたのも束の間で、万次郎は、急に外界は上へ上へとどンドン登っていき、彼自身は下へ下へと引きずり込まれるような感覚に陥った。電車が暗闇にすつぽりと包まれると同時に電車はきいきいと鳴いた。まるでそれはこの世界を創った芸術家が遠くで笑っているような響きだった。

電車は真つ暗と灯りが混ざった空間に敷き詰められたレールを右へ左へ、ただそれだけでなく上下にもひっきりなしに移動する。車掌はそんなことはとうに慣れてしまったかのような様子で、なにやら機械で連絡を取り合ったり、わけのわからぬ号令を呟いている。乗客たちも同様で特に何も気にすることなく各自の時間を過ごしている。

電車のスピードが遅くなり、駅に止まった。いやらしい光と数学の計算に満ちたホームが万次郎の目に映った。万次郎の降りる駅はもつとあとの駅だったので、万次郎はホームを力なく眺めていた。様々な格好、年齢の人々が各自の目的地にむかって各自のペースで向かっており、その内、だれも万次郎のほうへ目を向けた人はいなかった。万次郎はこの自分が一方的に他人を見ている関係を少し愉快に感じた。

車掌の合図でドアが閉まると共に、電車が少しずつスピードを上げて動き始めた。電車が再び暗いトンネルの中に突入しようとしている。徐々に電車から見えるホームの景

色、人影がおぼろげになるほど、万次郎はできる限りはつきりとホームを見ようと努めた。

するとその時、万次郎はその目に一人の白いワンピースを着た少女を見た。少女は杖を持った老人に杖を上げられていた。少女は汚い床に倒れながら必死に次の一撃が飛んでくるのを避けようとしているようだった。万次郎にはこの光景が瞬間を切り取ったタブローのようにしてのみ映り、その絵を残して電車は暗闇の中へ入っていった。

万次郎は暗闇の中で様々なことを考えた。あの老人の罵声、ステッキが少女に当たる音、少女の悲鳴、懇願、様々なことを想像し、そして嘆いた。そして何よりも万次郎の嘆きを導いたのは少女独自の雰囲気であった。少女の顔は万次郎には見えなかったが、彼女は全身で魅力を放っていた。そしてそれが万次郎を強く惹きつけた。

電車は彼の思いなど気にすることなく暗闇を突っ切り、そのことが彼の嘆きをより増大させた。ぐんぐんと決まった道を進む電車は万次郎に怪物のように映った。暗闇に均等に設置された柱や灯りが一段と彼を怒らせた。

「みんなみんな辞めてしましたさ。」

彼は頭の中でこう繰り返し続けた。いつしかそれが声になっても構わないというような勢いで繰り返し続けた。何億回と繰り返し返すうちに、その日は名前も聞いたことのない駅にたどり着いていた。

こんなことがあつてから彼は普段以上に顔がやつれ、シャルロツテを筆頭とした周囲から心配されることも多くなつた。そういつた意味で少女との出会いは彼にとって神からの救済のような意味合いがあつた。無傷の、朝見かけた美しい少女は万次郎を傷ついた少女以上に惹きつけたからである。トラウマなんてものは消化されたのだ。

少女と遭遇した今の彼にとって、地下鉄も今や彼の手段の一つとなつていた。彼はあの直線と直線、もしくは計算された曲線によってのみ成り立つホームの上に、あの少女を探すことに、彼なりのペテン芸術活動を見出した。以前は恐れていた、暗い世界の移動も今や万次郎の楽しみになつていた。あの真つ暗闇ほど素晴らしいものはないと、最近の彼は考えていた。というのも、よく見えないということは、何かがそこから出てくる可能性が大いにあると彼は考えたからである。

万次郎の手に今やタツソオはいない。しかし彼の耳には未だ名だたる音楽家たちが演奏を続けている。これは彼が選んだことである。彼はあの暗闇に芸術を見出すことはできて、時々電車が醸し出すあの騒音、轟音には何も見出せなかつたのである。見出すよりもむしろ、未だ彼は恐怖を感じていた。電車の叫び声は時々力強くなり、イヤホンに侵入して彼の鼓膜を振動させた。彼はそのたびに例の身震いをおこし、そして髪をかき回した。

しかし、今の万次郎にとつて電車の鳴き声なんて普段は大人しい飼ひ犬が時たま不機嫌になつて吠え出すことくらいのものであつて、以前よりはずつとどうでもいいものになつていた。今の彼は目の前に広がる真つ暗闇に夢中だつたのだ。無限に繰り返される電車のカーブや上下はさらに暗闇の可能性を広げるものとして、彼に愛された。

少女との出会いから3か月たつても、万次郎には精神に少女を見出そうとする気持ち十分にあつた。しかし、実際に再会したいという気持ちは皆目なかつた。彼は心のどこかで少女を恐れる点があつた。正直なところ、彼は少女の本当の顔を忘れ始めていたのである。何回も少女を自分なりに創造したせいで、少女は彼にとつての最大の美人となつていた。いや、美人とも、可愛らしいとも言えない絶妙な女へと少女は成り上がつていた。万次郎自身はそのことを自覚していた。万次郎にとつて、その少女との関係は永遠ではなく、きっかけであれば十分だつたのだ。

万次郎が神秘的な出来事を体験してから5か月がたつたある日のことである。もう春が始まつている。万次郎は今日も手には何も持たず、耳にはイヤホンをして、真つ暗闇の世界をのぞいていた。電車はいつも通り制御された速度で万次郎を輸送していた。今の万次郎はもはや電車がそのようにして進んでいるかは気にならない。ただ薄暗闇のパ

レットに少女を想像することのみに精神を集中するのだ。

暗い世界が終わり、あたり一面を人工光が照らしだすと、万次郎は下を向いた。少女が眼前に現れるのを避けたのである。そこは乗り換えの駅だったため、彼は電車を降りた。一瞬前を見たが少女はおらず、彼は心から安心した。薄汚れたタイルを見ながら万次郎はたんたと一段とぼしで階段を上る。彼の両側には見たことのある俳優が広告となつて出現し、様々な宣伝をしている。万次郎はその広告だけが地下と地上とをつなぐ唯一の媒介だと思っていた。しかし、俳優というのも本当に実在するのかという疑問が彼にはあり、その媒介は確かなものでは彼にとつてなかった。階段の脇に流れている正体不明の汚水のほうがよほど現実味があると万次郎は思った。

違う路線のホームについた。また彼はいつも通り下を見ている。どうやって今回は少女を創造しようか、ということを演奏に耳を傾けながら彼は考えていた。

彼はおびえながらも、怖いもの見たさで前を見ようとした。少し下を見すぎて首が痛くなつてきたというのもあった。彼は上目でちらりと前を見た。しかしそこには少女はいなかった。いるのは一般的な女性、男性のみである。彼は安心して、再び創造に専念しだした。

彼は創造の傍らで、音楽にも聞き入った。以前は手段でしかなかった音楽が、万次郎

自身に何か影響を与えていることに自覚し始めたのである。耳元ではウラディミール・アシケナージが完璧な演奏を何度も繰り返している。その同じ演奏の繰り返しは彼にとつて極めて奇妙なものであったが、彼はそれでも受け入れた。

ショパンが二百年近く前に作り出した音色に感化されながら彼は少女を作り上げていく。白鍵のような小さいパレットに二重の目を最初につける。鼻はそこまで高くなく、それが逆に可愛らしさを演出している。口は小さく、それはさながら美化された子供の落書きのようである。耳は顔に対して比較的大きく、それが顔の小ささを引き立たせている。最後にかつらと眉毛とまつ毛のセットを丁寧にかぶせて彼女は完成するのだ。最近の少女は可愛らしい傾向が強いな、と彼は思った。電車を待つ時間も乗る時間も、降りて歩く時間もすべてが有意義であり、万次郎は満足げにタイルを眺めた。彼に今や過去などはなく、存在するのは現在、未来のみであった。最近の床は彼に美しく映る。

万次郎の精神の安定を打破るように、人間が作った機械特有の誤作動により大音量でショパンが暴れだした。万次郎は驚いてしまい、びくと体をのけぞらせて前を見た。見てしまった。すると向かい側のホームには例の少女がたっていた。彼女は以前のワンピースを着て指示通り白線の内側で立っていた。彼女のワンピースは地下鉄独自の原因不明の突風でばたばたとはためいていた。それはどこか霊的な雰囲気があった。

万次郎はその様子を見て

「しまった、顔ばかりを見ていて胴体を考えるのをすっかり忘れていた。」

と思った。彼女は安定して神聖であった。

彼のアシケナージは所詮機械なので空気を読むこともないまま演奏を続ける。彼が今弾いているのはショパンのエチュードの三番である。弱起から始めるこの曲を、彼は音と音の間をめいっばいひき伸ばしながら弾いた。何か欲望をこらえている様にも聞こえるこの演奏は、どこか空虚さを漂わせる。ピアノは木に音を反響させて様々な音色を作り出すが、ここまで感情を引き立たせるなら、木には感情があるのではないかと彼は思わせられた。ところどころに計算されて散りばめられたフォルテを、演奏者は丁寧に、華麗に弾きこなしていく。曲はどんどん盛り上がりを見せていく。

日本人は特有のセンスでこの曲に「別れの曲」というタイトルを付けたが、その気持ちが始めて万次郎に分かったような気がした。彼は自身の欲望によって切り捨ててきたものが多々あったのを自覚し始めていた。

欲望の制御が効かなくなるにつれて、クレッシェンドが進み、最終的にはメゾフォルテの和音で終了した。そのあとに続く音色の余韻はなぜか虚しさを漂わせる。この時の万次郎の精神に浮かび上がっていたのは、小学校の体育館や、かつて新婚旅行で行った砂漠の星空であった。

万次郎はこの曲が展開するまでの部分が好きであった。それ以降の部分を万次郎は再

生を停止してしまうのが常で、今回も例外ではなかった。彼がこれほどこの曲に思い入ったのは初めてであった。彼には自分の今までの出来事を思い出して泣き出しそうになっていた。

万次郎は久しぶりに現世に生きようという気分になっていた。

ふと、前を見ると反対側のホームから電車が薄暗闇に突っ込んでいくのが見えた。もうそこに少女はいなかった。その代わりに、例の老人が所有していたステッキが置いてあった。ステッキは彼を動揺させ、万次郎自身は落ち着くためにもう一度今の感覚を欲したが、何度同じ曲を聴いても無駄であった。彼がショパンに聞き入れたのはあの瞬間のみであった。

駅のホームの空間、光、直線、曲線、マイル、すべてがあの一瞬は美しく彼には見えた。しかし、ステッキを見た瞬間彼は一気に気が沈んだ。謎の空虚な余韻に浸り、すべてを受け入れることの出来ない自分の要領のなさを悔いた。彼は自分が真の芸術家になり切れない、ただの俗人だと自覚した。

電車がこちら側のホームにやってくる。そして電車は「やった、捉えたぞ。」というように万次郎をばんと捕まえて、万次郎は花火のように薄暗闇の中に消えていった。

万次郎の脳裏にはシャルロツテと杖に倒れる少女が同じくらい濃く映っていた。

アーサー王研究会創作文庫

電車

著者 福本紘久

2014年 1月 15日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学教養研究センター

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2014 FUKUMOTO, Hirohisa Printed in Japan

非売品

